

内定をもらえる学生ともらえない学生

－鹿児島県立短期大学における就活エピソード－

内田 克巳

1 はじめに

本学の学生課で就職指導に携わり、15年目を迎えた。この間、様々な就活エピソードに遭遇し、喜び、悲しみ、驚き、そして反省の思いを味わった。

その中でも特に印象に残っているエピソードを紹介するとともに、コメントを付記したい。これから就活を始める学生や指導する教員の少しでも役に立ち、学生が自分に合った職場に就職することができ、ひいては社会人の育成という側面から鹿児島の発展に寄与できれば幸いである。

2 成功例

エピソード① 「飛び込みの求職活動」

大規模商業施設の工事現場にあるプレハブの事務所を訪ねて「何か仕事がありませんか」と聞いた学生。いやはや思い切った行動に出たものである。なかなかできるものではない。現在、彼女はこの大規模商業施設の管理会社でバリバリ働いている。さすがに、これを真似なさいとは言えない。しかし、この積極性と行動力。この2つは就活に必要である。難しいことではない。例えば、興味のある会社があったら企業ガイダンスや単独説明会で最前列の席に座る。そして、メモを取る。説明が終わったら人事担当者に質問をする。これだけやれば、きっとその会社の人事担当者はこの熱意ある学生の顔と名前を覚えるはずである。

エピソード② 「笑顔で即日内定」

ある保育園に職場訪問も兼ねて応募書類を持参した学生。対応した副園長先生から「ちょっと待っててください」と言われ、何と面接が始まった。そして、「笑顔がいいね」と誉められ、内定を告げられた。予定されていた作文も筆記試験も免除されたそうである。第一印象がいかに大事か。笑顔がいかに大事か。そして、会社訪問から実は採用試験が始まっているということを忘れないでほしい。入試の日と入学式の日、ほとんどの学生が笑顔で挨拶する。しかし、入学式の翌日から挨拶する学生は減り続ける。笑顔の挨拶は、就活にとって、とても大きな武器である。普段の面接指導でも笑顔の大切さは指摘するのだが、笑顔が出ればもっと魅力的になるのにと考えた学生には、特に笑顔を意識するようにと指導している。

エピソード③ 「就活中に名刺をもらった学生」

これもエピソード①と同様、これまで1人しかいない。なかなかあることではない。会社訪問に行った学生が学生課に来て「エレベーターの中で名刺をもらいました」と報告に来た。くわしく話を聞くと、その学生は、志望の会社が事務所を構えている共同ビルのエ

エレベーターに乗って、乗り込んでくる人に「お疲れ様です」と声をかけていたらしい。そうしたら、ある女性から「就活中ですか。何か困ったら私を訪ねていらっしゃい」と声をかけられ、名刺を渡されたとのこと。その名刺にはある会社の人事担当者の名前が記載されていた。この学生は、就活を始めるに当たって、それまでの茶髪を黒髪に戻し、スーツを着用し、学生課に来て「本日からよろしくお願ひします」と挨拶した学生であった。そういう学生は、何と表現したらいいのか分からないが、他の学生とは違う雰囲気と魅力を持っている。私も合同ガイダンスで、そういう学生に一度だけ出会ったことがある。身だしなみ。姿勢。視線。表情。文句のつけようがない。そして、私もエレベーターの女性と同様、その学生に「何か困ったら私を訪ねていらっしゃい」と言って名刺を渡した。結局、その学生は来なかったのだから、困ったことにはならなかったのであろう。ある会社の人事担当者の方は、内定した学生を評して「彼女は目力（めぢから）が強いですもんね」と言われた。企業は、自分たちと一緒に働いてもらうにふさわしい人を多くの学生の中から選んでいるのだということをお忘れなでほしい。

エピソード④ 「アルバイトを甘くみることなかれ」

ある会社の人事課長は、系列のスーパーで買い物をするときは、いつも決まったレジに並ぶようにしていたそうだ。なぜならそこには、とても感じのいいアルバイトの女性が接客していたからだ。その女性から笑顔で「お疲れ様です」と声をかけられると一日の疲れもふっとび、元気をもらえたそうである。そして、面接の日、そのアルバイトの女性が何と受験生として自分の前に座ったから驚いた。その人事課長は念のため系列のスーパーの店長にその学生の日頃の働きぶりを聞いたそうだが、試験の結果は言わなくても分かるであろう。アルバイトといえども一生懸命やっていたら、見ている人はちゃんと見ている。もっとも、飲食店でアルバイトをしている学生から宴席で接客をしていると、酔っぱらったお客さんが「就活中ね。うちの会社において。採用決まり」と言われたと聞くこともあるが、その手の話は、あまりあてにならないようなので、ご注意。

エピソード⑤ 「内定者報告に学生が鉢合わせ」

ある病院の人事担当者が学生課に内定者の連絡に来られた。私は、内定した学生の名前を聞いて人事担当者に声をかけた。「ちょっと待ってください。その学生ならさっき学生課の前にいましたよ」そして、席を立ち、会議室の外に出て掲示板を見ている学生を部屋に招き入れた。内定の連絡は、メールや電話や郵便が多い。直接来校され、たまたま、その内定した学生が近くにいたということは、めったにない。運命というか縁というか。高校受験や大学受験は、ある程度選択肢が絞られるが、会社選びというのは、たくさんの会社の中から業界や職種、勤務地を絞っても会社の数が相当数あり、とても難しいものである。そのたくさんの会社の中から内定先を決めた学生からよく聞くのは、「自分とその会社に縁があると感じた」という言葉だ。そういえば、プロ野球の大谷選手も大リーグに移籍するに当たって、「エンゼルスに決めたのは、縁を感じたから」と記者会見で言っていた。

エピソード⑥ 「迷った時は、字がきれいな学生」

採用試験を終えたある会社の人事担当者から電話があった。「内定はAさんに決めまし

た。AさんとBさんは、筆記試験も面接試験も同じ点数で、どちらにするかとても迷いましたが、Aさんの履歴書の字がBさんよりきれいだったからAさんに決めました」履歴書の字が内定の決め手になったというエピソードである。学生の字は個人差が激しい。書道の経験から見事な字を書く学生もいれば、とても読みづらい字を書く学生もいる。きれいに書くにこしたことはないが、とにかく丁寧に書いてほしい。入学の時に学生が提出する「学生調査書」の中に携帯電話の番号が書いてあるのだが、電話をかけようとして、0なのか6なのか7なのか9なのか迷うことがある。そんな履歴書を提出したら書類選考で落とされることは間違いない。見る立場になって字を丁寧に書いてもらいたい。

エピソード⑦ 「諦めない姿勢」

公務員になることを目指しているが予備校に通わず自宅学習中のAさん。1年生のときから本学が行う公務員模試を受験していた。午後8時過ぎ、残り時間20分。ほとんどの学生は、問題を解くのを諦めて机につっぷして寝ている。だが、Aさんは諦めない。「終わり」の合図まで、問題を解き続ける。だが、判定はいつもD判定。学生課の職員誰もがAさんは合格することは難しいと思っていた。しかし、筆記試験の結果は何と合格。面接試験も突破して、見事最終合格を勝ち取った。諦めない力の大きさに驚かされた。もう一つ。金融機関希望のBさん。金融機関を受験し続けるが5社受験しても内定をもらえない。さすがに11月頃、進路資料室にいる彼女に私は声をかけた。「Bさん。そろそろ他の業界も考えてみたらどうかな」しかし、彼女は諦めていなかった。今年、求人のでなかったある金融機関に電話してみると言う。そこは、私も電話で求人がないことを確認したところだ。「そこも電話したけど、求人はないそうだよ」ここまで言われたら普通は諦めるだろう。だが、彼女は諦めなかった。「私が自分で電話をしてもいいですか」と聞かれたので「それは構わないですよ」と返事した。そのあと電話した彼女は、受験の機会をもらい、念願の内定を勝ち取った。後日、人事担当者とそのことを話したら、「社長がそこまで熱心な学生なら会うだけ会ってみようと言われたんですよ」と言われた。彼女の熱意が社長の気持ちを動かしたのだ。常にうまくいくとは限らないと思うが、どうしても自分が入りたい会社があれば試してみる価値はありそうだ。

エピソード⑧ 「19社目の内定と社長さんの手紙」

現在の好景気や売り手市場からは想像もできないと思うが、かつて就職氷河期と呼ばれた時代があった。その当時は短大生でも10社受験するというのが当たり前の状況だった。その中でも就活に苦戦していたAさんはなかなか内定をもらえず、5社、10社、15社と受け続けても決まらない。どうにか19社目で内定をもらえた。その内定通知が大学に送付されてきたのだが、その中に社長さん直筆の手紙が同封されており、Aさんの面接をして彼女の人柄にとっても魅力を感じましたと書かれていた。それを読んで自分のことのように嬉しかった。内定通知に社長さん直筆の手紙が同封されているのはとても珍しいことである。エピソード⑤でも書いたがAさんは「縁のある」会社に19社目で巡り合ったわけである。

3 失敗例

エピソード⑨ 「14時を4時と聞き違い」

ある学生から明日の午後4時から面接ですと聞いてちょっと遅いなと思った、案の定その後、その学生から「面接は午後2時からで、行ったときはもう終わっていました」と半泣きの声で連絡があった。あの時、時間に間違いはないか確認するように指導すればよかったと反省するが、もう遅い。会社から電話で連絡があると緊張してしまうのは当然だ。しかし、聞き違いをしてしまえば何もならない。日程は必ず復唱しよう。「日時を復唱します。○月○日○曜日の14時 午後2時からでよろしいでしょうか」この一言を言うのは決して失礼には当たらない。時間といえば今年も会社から「面接の時間になっても学生が来ない」という電話が2回あった。1回目は受験の辞退。2回目は遅刻。まず、受験の辞退を相手に連絡しないというのは、とても失礼なことである。「何かあったのだろうか」と会社はもちろん私たちも心配になる。面接指導でも予約した学生が来ないことがあるが、来られないならとにかく連絡をすることだ。ただし、公務員試験の1次試験の欠席は連絡しなくても構わない。それから遅刻というのは言うまでもないが第一印象がとても悪くなる。余裕をもって、遅くとも10分前には受験会場に着くべきだ。これから就活を始める学生は「10分前行動」を心掛けてほしい。

エピソード⑩ 「会社のホームページを見ていなかった学生」

ある会社の人事担当者から「貴学の学生に「当社のホームページの感想を聞かせてください」と質問したら「すみません。見ていません」と答えられましたよ。残念でした」これでは、内定をもらえるはずがない。会社からすると学生に熱意がないと判断される。「企業研究」の必要性は、ことあるごとに指導しているのだが、たまに不十分な学生が見受けられる。ホームページを見ることはもちろん、会社訪問をぜひやってほしい。自分が働くところとする職場を見学しないと会社の雰囲気も分からないし、自分が働く姿も想像できないはずだ。求人票に会社訪問が不要と書いてある場合でも少なくとも会社を外から見るとか、その会社で働いている先輩から話を聞くことをやってほしい。その手助けは学生課がするので、遠慮なく相談してほしい。時々、内定をもらってから内定先の先輩に話を聞きたいので紹介してほしいという学生がいるが、これは順番が逆である。先輩に話を聞いてから会社を受験すべきである。

エピソード⑪ 「面接で注意された学生」

接客希望のCさんはなかなか内定をもらえなかった。面接練習でも笑顔が出ない。ある会社の面接終了後、Cさんは面接官から声をかけられた。「接客の仕事をしたかったら、もう少し笑顔を出さないと厳しいよ」学生課の職員より会社の人事担当者から言われる方が効果がある。そもそも面接官が注意することが珍しい。注意してくださる面接官はありがたい存在だ。Cさんは、その後めでたく接客の仕事に就いたのである。注意されたことで落ち込むのではなく、ありがたいと思って素直に自分の足りないところを直そうと努力することで、いい結果に結びついたのである。

エピソード⑫ 「設営を手伝わなかった学生」

どういう経緯か分からないが、5人の受験生の近くで試験会場の設営が始まったようだ。その様子を見て2人の受験生がさっと立ち上がり、設営作業を手伝ったようだ。残念ながら本学の学生2人はその様子を黙って見ていたとのこと。とっさの判断力、行動力、体が動くか動かないか大きな違いである。エピソード③でも書いたが、会社は自分たちの同僚として働いてくれるにふさわしい学生を選んでいるのだから、どちらの学生が内定をもらったかは言わなくても分かるであろう。

エピソード⑬ 「就活より卒業旅行」

なかなか内定をもらえない学生に1月下旬に電話した。「来月、試験がある会社から求人が来たよ」「すみません。その頃は卒業旅行に行く予定で鹿児島にはいません」確かに卒業旅行も学生時代の思い出となる大事なものだろう。しかし、就活はもっと大事なんじゃないのかなと思う。就活が1年近く続くとさすがにモチベーションを保つのが難しいかもしれない。そういうときは、しばらく就活を休むのもいいかもしれない。休み続けられても困るが。

エピソード⑭ 「内定式当日の内定辞退」

正式内定日の10月1日に電話が鳴った。午後から東京にある本社の社長が出席して内定式を行う予定の会社の人事担当者からの電話だった。本学の学生がついさき内定辞退の電話をしてきたとのこと。相当怒っておられる。当然だろう。社長が来られるというのに当日の辞退とは。こちらは、受話器を握りながらひたすら頭を下げ、謝罪の言葉を繰り返す。最近の好景気や売り手市場の状況から複数社の内定をもらう学生もいるだろう。問題は、辞退のタイミングだ。6月から面接試験が始まり、内々定が出る。7、8月の内定辞退は、あまり問題にはならない。正式内定日の10月1日以降の内定辞退は、このように問題となることが多い。入社承諾書も提出しているだろうし、会社にとって一番頭の痛い問題が内定辞退だからである。3年生から余裕を持って就活に臨む四大生と違い、どうしても短大生は就活が遅れがちだ。そのため、10月1日以降も複数社の内定を持ったままの学生がいる。早めに1社に絞ることが必要だ。法律的には、入社前であれば内定の辞退は自由ができる。しかし、例えば1月とか2月に辞退するというのを想像してほしい。辞退された会社は4月入社の社員確保のためにそれから急いで求人をしてほしい。入社を予定していた社員が入社しないということであれば、他の社員にも迷惑をかけることだろう。自分のことだけでなく、相手のことも考えて就活に臨んでほしいものである。

エピソード⑮ 「内定後の豹変」

ある会社の人事担当者の方から電話が来た。鹿児島弁丸出しである。「こんまえ、内定を出した学生に会社に来つくれち電話をしたなら、髪の毛がわっぜ明るか茶色になっせえ、ひっきゃぶれたジーパンにサンダルを履いて、最初は、誰(だい)が来たかち思いましたよ」笑いをこらえるのに必死になったが、ここは謝らないといけな場面だ。その学生には、内定後に会社に行くときは必ずスーツ着用で髪の毛も黒に戻すことを言い聞かせた。私服で構わないと言われな限りは、会社訪問や内定者集合などに参加する場合はスーツ着用

が常識である。食事会だからといって私服で出かけた学生は、周りが全員スーツ姿だったため恥ずかしくて美味しそうな食事でも全然美味しく感じなかったそうだ。もう一つ毎年繰り返されているあまり書きたくないエピソードを紹介しよう。先月まで学生課に頻繁に通い、内定をもらったDさん。久しぶりに大学内で見かけた。「元気ね」と声をかけようとしたが、ぶいと顔をそむけられてしまった。「もう内定をもらったんだからあんたに用はないわよ」とDさんが思っているのじゃないのかと感じるのは、私の人間としての器が小さいせいだろう。

エピソード⑩ 「新聞を読まない学生」

毎日の面接指導で学生に質問をする。「今日の新聞で気になった記事をお話してください」ほとんどの学生が同じ答えである。「今日はまだ新聞を読んでいません」意地悪な質問を重ねる。「では、昨日の新聞で気になった記事は」「すみません。昨日の新聞も読んでいません」新聞を読まない学生の多いことには驚かされる。もっとも、ある会社の人事担当者の方も「若い社員が新聞を読まないのが悩みです」と語っていたので、本学に限ったことではないようだ。それでも毎日同じ質問を繰り返す。

エピソード⑪ 「ほうれんそうをしない学生」

履歴書添削、マナー指導、面接指導を受けて本番の試験を受けた学生。指導した身になれば当然どうだったのか結果が気になる。しかし、いつまでたっても報告に来ない。学内で見かけたときにこちらから「試験どうだった」と聞くと、「内定もらいました」と言う。また、内定をもらっても連絡せず、電話をすると3か月前の日付の内定通知書をやっと持って来る学生もいる。まだ、内定が決まらず求人票を見ている学生にこちらから声をかけるといろいろ相談を始める。いずれも受け身の姿勢である。社会人になっても報告・連絡・相談即ち「ほうれんそう」は、とても大事なことであることを再認識してほしい。

4 入社後

エピソード⑫ 「求人は先輩の働きぶりで決まる」

本学への求人が一番ありがたいのが、本学だけに求人をしていきますという企業からの求人である。応募すれば必ず本学の学生が内定をもらえるからである。数は多くはないが、それでも毎年2、3社からこういうお話がある。理由を伺うと「貴学の卒業生が頑張って働いていらっしゃるの、ぜひ今回もお願いします」とのお答え。自分も嬉しくなってくる。卒業生の顔を思い浮かべ、「ありがとう」とつぶやく。しかし、逆なケースもある。これまで本学だけの求人だったのに、求人も来ない上にハローワークに求人票を出している企業がかった。人事担当者にその理由を尋ねると「学校推薦で入社した学生が四年制大学に編入すると言って1年で辞めた。どうしてそんな学生を推薦したのか」と相当お怒りの様子。怒るのは当然だ。1年というのは企業が育てて、やっと一人前になるかならないかというところ。おまけに学校推薦。そして、編入。こちらは「申し訳ありませんでした」とひたすら謝るだけだ。確かにその学生は編入に不合格で就職に切り替えた学生だった。あのとき学生に本当に編入は諦めたのかよく確認すればよかったと反省する。そして、ハローワーク求人から受験した学生は残念ながら全員不合格だった。学校推薦に応募するときは、

じっくり考えて家族ともよく相談して応募してほしい。安易な気持ちで応募すると、このように後輩にも迷惑がかかる。

エピソード⑩ 「3人3様」

大企業の鹿児島支店に3人の学生が内定した。喜ばしいことである。しかし、その3人の中のAさんが入社半年後、学生課を訪ねて来た。表情が暗い。聞けば土日祝は休みなのだが、月曜から金曜までが毎晩8時とか9時まで仕事をしているとのこと。「私は平日もできれば6時くらいには帰りたいんです」「ほかの2人はどう言ってるの」と尋ねると、「2人は、気にしていないみたいです」との答え。それから2年後、Aさんが会社を辞めたと聞いた。残った2人のうち、1人は結婚して子育てをしながら現在も働いており、もう1人は結婚を機に辞めたとのこと。このケースで思うのは、自分のライフスタイルと選んだ会社がマッチしてないとなかなかうまくいかないということ。就職指導をしていてよく学生から質問をされるのが「いい会社はありませんか」という質問。私は、「あなたがやりがいを持って働くことができれば、それがいい会社ですよ」と答えるようにしている。そのためには、自分のライフスタイルや何を重視して働きたいのかということを決めるべきである。例えば、実家から通勤したいのか一人暮らしをしたいのか、土日祝休みがいいのか平日休みでいいのか、ノルマがあってもいいのかノルマがある会社には行きたくないのか、残業があってもいいのか6時くらいには帰りたいのか、車通勤か電車やバスでの通勤か、結婚・出産後も働きたいのか結婚したら辞める予定なのかなどなどである。そのことを決めてから就活に臨めば、少なくとも入社してすぐにミスマッチは生じないはずである。

エピソード⑪ 「人間関係で退社」

8年前に卒業生アンケートを実施した。卒業後に就職した会社に勤めているか辞めたかという質問に「辞めた」という回答が予想以上に多かった。全体の29%で平均勤続年数約2年。退職理由の第1位が「職場の人間関係」であった。約4割の比率である。正直、この問題が一番やっかいである。まず、入社前に予測できない。会社訪問ではなかなか他の社員の人柄までは分からない。学生時代までは、自分と合わない同級生とは無理してつきあわなくてもいいが、社会人ともなればそういうわけにもいかない。せっかく希望の会社に入社できたのに、職場の人間関係で辞めた卒業生のことを思うと心が痛む。この問題については、なかなか一般論としてのアドバイスは難しい。卒業しても仕事上の悩みがあれば遠慮なく学生課に相談に来てほしい。ここで、ある卒業生のケースを紹介したい。その学生は、希望の会社に内定をもらい働き始めたが、職場に厳しい上司がいてその上司との人間関係に悩み、早くも5月に相談に来た。夜も眠れず、食欲もないということで驚くほどやせていた。身体をこわせば何にもならないと思ったが、本人は仕事を続けたいとのこと。それから3年頑張っていたところ、その上司が異動になり、職場の雰囲気が変わり、本人も「あのとき辞めないでよかった」と言っていた。

エピソード⑫ 「隣の芝生は青く見える」

分かりやすく言うと「他の会社は自分の勤めている会社よりよく見える」だろうか。入

社してしばらくすると、卒業生が学生課を訪ねてくる。近況報告ならいいのだが、「きつい。辞めたい」という相談だと気分が落ち込む。いろいろ不満を聞いて、話しかける。「でも、土日祝が休みなんだよね」「そうなんです。だから辞めようという決心がつかなくて」「じゃあ、もう少し様子を見れば」私に話してすっきりしたのか卒業生は笑顔で帰っていった。100%満足できる職場は存在しない。どの職場にもいい所もあれば、不満を感じる所もあるだろう。また、学生から社会人になるということは、これまで授業料を払っていた立場から給料をもらうという立場に変わるということであり、厳しいのは当然である。特に1年目は誰でも「辞めたい」と思うことが多いと思う。私も社会人1年目は何度も辞めようと思った。しかし、今は「あのとき辞めなくてよかった」と感じている。

5 おわりに

ある会社のホームページに「就職は結婚にかなり似ている」と書いてあった。いずれも人生の大きな選択である。お互いの相性が合わないとうまくいかないという面でも確かに似ている。ある学生が「今度は大丈夫です。筆記試験も面接も完璧にできました」と報告に来たが、結果は不合格。その会社の求める人材に合わなかったのだ。ここが成績がよければ合格できる高校受験や大学受験と就職試験が決定的に違うところだ。

笑顔で元気のある学生を全ての会社が求めているかといえばそうでもない。ある会社の人事担当者は「今年は、おとなしくてもいいから芯の強い学生を探しています」と言われていた。

就活は初めての体験で不安に感じている学生が多いと思う。しかし、当たり前のことをちゃんとやれば結果は必ず出るものだ。当たり前のこととは何か。「自己分析」「企業研究」「履歴書作成」「筆記試験対策」「面接試験対策」である。履歴書がなかなか書けない学生に聞いてみると案の定、自己分析をしていない、会社のホームページを見ていないと言う。これでは自分の長所や志望動機が書けるはずがない。当たり前のことをちゃんとやってほしい。

そして、就活で壁にぶつかったら、どうしたらいいのか分からなくなったら、悩みがあったら人生の先輩である家族や教員そして学生課職員に相談してほしい。

さあ、就活の第一歩を踏み出してみよう。

